



#02 特集: ドラッグ Happy Brain!

定価1800円+税 B5変型判

スマートドラッグからドラッグまで自己を拡張し、脳を快適にするには。ドラッグとはなにか、スマドラ、リサーチケミカルとは？ ドラッグカルチャーから男の更年期障害まで、いまさら聞けないドラッグのすべて。ドラッグしなくとも脳を快適にするビジュアル満載！（表紙はPVCエンボス加工のカバー掛け）

スチュディオ・パラボリカ
〒111-0034 台東区雷門1-2-11 雷門フコク生命ビル3F
TEL:03-3847-5757 FAX:03-3847-5780
<http://www.2minus.com>

なるステップ、解説というテキストなのだ。それがうまく流れはじめて理解の第一歩にたどりつく。

ビジュアル

メインで作られている雑誌はあるかが今回の出版でトライしたいことのひとつでもある。テキストも、実践的な内容のものであって、スカシた文体は必要ない。なぜなら、私がわかりたいからである。私の好奇心を満たすために雑誌をやっている。私がやりたいのは、感覚がひらくような世界がそこに立ち現れるセンサーを共有できそうな人々にわかちあつてもらいたい。かれら的好奇心を喚起したい。そして、恐らく、その人々は

複合ビルの中にあり、開館時間は休館日
の月曜を除いて毎日午前十時から午後八時（！）まで、市民にとって恵まれた環境
のように思われるが、地元での知名度は
まだ決して高くない。美術館への行き方
を尋ねられ、目印に同じビル内のホテル
名を挙げると、「あら、あのビルの中かな
の？」という反応が返ることもある。表か
ら見えるのは小さな看板と展覧会のポスター
、そして屋外作品が一点。中に入つた
ても美術館用のエレベーターは奥まつた
場所にあり、残念ながらその存在はまことに
とんでもない。ここで年に四五五本の企画展と、コレクションを主体とした二本の
小企画展を行つてゐる。収蔵作品は地元作家やその関連作家による油彩画、水彩画、版画、彫刻、工芸等と

んなに文字だけではなかつたし、やたら写真や図版が多いのも特徴だつた。ただ、サイズがA5判で、ほとんどモノクロ印刷だつたということだ。やや大きめの判型で色がつくと、ビジュアル誌的に見えてしまうということなのだろうか。

『2マイナス』では身体的なものと記憶との関係を探つていきたいくらいといつてゐる。それは私が知りたいこと、好奇心がワキワキしてしまうものだから。と言つても、専門的なものではなく、私が楽しんでいる、そこらへんの日常や芸術のなかでアリアリティを感じるものを通して知りたいだけだ。

まるごと特集の雑誌（まあ、ムックのよ
うなものです）を作っていた。二年前、
ペヨトル工房が解散したので、私は独立
してデザイン事務所をやっている。出版
社を作る気は毛頭なかつた。でも雑誌を
作つてしまつたのだ。
『2マイナス』は判型がB5変型になり、
ほとんどカラーページで横組。誰からも
見る雑誌になつたね、と言われる。
そうかなー、と思う。みんな、だまさ
れてるかも。

文章量は『夜想』よりはかなり少なくななる予定だった。ところが実際、編集が始まると、膨大な原稿の量に頭を抱えてしまつた。全体のページ構成も視覚的に展開するもので、あくまでテキストは補足と解説、興味を深めるためのアプローチの提供というサブの位置づけだった。がイメージモデルがないこともあつて、編集者にうまく意図を伝えられなかつたのだ。宣伝物や出版物のディレクションで意図を伝えられずこまつた経験というのはない。それくらい雑誌の構成を新しく考えるというのは大変なことなのだなと思いつた。

「本をめぐるアート」——二年前にオーブンしたうらわ美術館では、「地域ゆかりの作家」と並んで、この「本をめぐるアート」を収集方針に掲げて活動している。「本をめぐるアート」とは一体何だろう。めぐりめぐる迷宮とも言える「本の美術」について、一学芸員の視点から簡単紹介してみたい。

「本をめぐるアート」に関する作品及び資料四四四タイトル(約一五〇〇点)である。では本題に入ろう。「本をめぐるアート」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろうか。開館当初ある美術記者から、美術《として》の本ではなく、美術《につて》の本=いわゆる美術書と誤解され、「本の美術」に対する一般的な認識の低

さを痛感したが、実は今でも理解してもらうのがとても難しい。うらわ美術館では美術作品としての本、本をテーマにした美術作品を対象にこの言葉を用いているが、その領域と内実はとても一言では言い尽くせない。

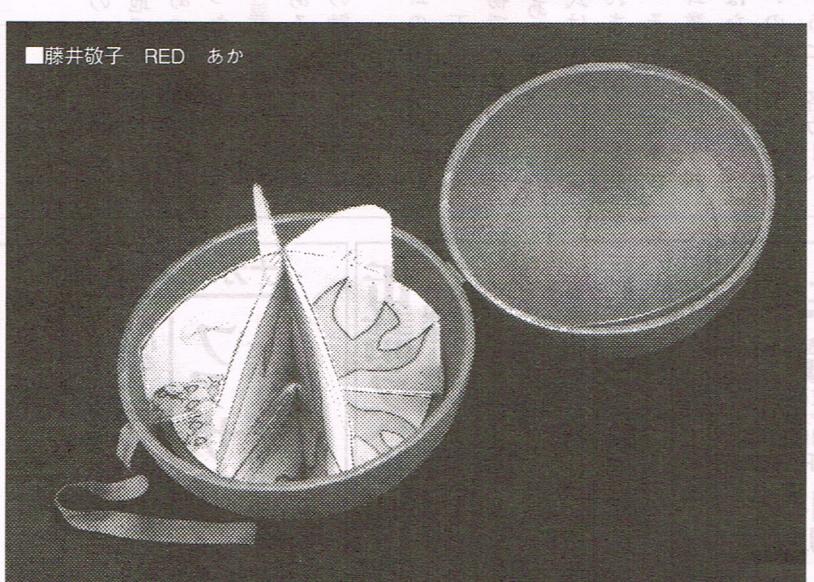
「本をぬぐるアート」をぬぐる試み

吉本麻美

クリエーターが、クリエイティヴな人
らうから、次にはかれらが創つたもの
愉しみたい。というのが本音である。

ル・イベント「memory」が開催された。この「メモリー」とはコンピュータ用語である。記憶にとどめるというよりは、記して次へつなげていく装置が、このベントなのだと思う。『2マイナス』もんな装置でありたい。

■プロフイール（みるきい・いそべ）装幀家・エディトリアルデザイナーとして数多の出版物の製作に携わっているが、現在刊行中の「21世紀文学の創造」（全9巻別巻1、岩波書店）などはその一例。現在「2マイナス」发行人、元「夜想」アートディレクター。「夜想」刊行 당시、「ボップアヴァンギャルド」「写真新世紀」「ハイパー・アート」のキヤッヂコピーリの創案者でもある。共



■ 蘭桂坊 252 九〇

の他にも、巻物や飛び出す本、アコードィオンのように折れる本、紙以外に布や石、革、鉄でできた本。数百年、数千年に及ぶ歴史を辿っていくと、本が何なのかどんどん怪しくなつてくる。逆に最近では電子出版も盛んである。これは本なのか？一方、「美術」とは何だろう。二十世紀に入ると「作家が作品だと言えばそれが美術作品である」という極端な発言や、作品を鑑賞するはずの観客が参加して初めて成立する作品などが生まれた。何を「美術」として認めるのか、「本をめぐるアート」は「本」と「美術」をめぐる二つの大きな難題を抱えているのである。私達は

収集候補の作品と向かい合う度に、それが「本をめぐるアート」に相当するかどうか問い合わせながら、時には激しい議論も交えつつ、収蔵作品を決定する。かく選ばれた作品の中には、花火玉の中に詩と版画を収めた藤井敬子の「RED aka」や、ボックスの中に多数の複製物を収納し、取り出していくとあたかも小さな美術館が出現するかのようなマルセル・デュシャンの「トランクの箱」(註1)等も存在する。一見して本とは思えない作品でも、その内容により「本をめぐるアート」になり得る場合があるのだ。

また、「本」と「美術」をめぐる言葉 자체も私達を悩ませる。例えば当館では昨年、「本」という美術—大正期の装幀から現代のオブジェまでーと題した展覧会を行つたが、装幀の「帳」という字を決めるまでが大変だった。「そうていひは當用漢字による一般的な表記である「装丁」」の他に、装幀、装釘、装訂と様々に書き表され、各々意味内容が異なると言われている。展覧会担当者はその詳細について方々調べまわつたが、実態は混沌として結論が出ない。出品内容と照らし合わせて、今回を取りあえず「装幀」に落ち着かせたのである。ちなみにこの「そうていひは「本をめぐるアート」」の一部だが、全てではない。「造本」や「装本」という言葉もあるが、これもまた不十分である。外国语においても「アート・ブック」「ブック・アート」「リーグル・ダルティエスト(フランス語で芸術家の本の意)」「ペインター・ブック・ブック」「アーティスト・ブック」「ブック・オブ・ジエ」「ブック・イン・スタイルーション」など、本と美術をめぐる言葉は際限がない。しかも「そうていひ」同様に定義が難しく、「本の美術」をめぐつては、いまだに言葉の使い方一つにも多くの議論がなされているのが現状である。

「近代」美術館が統々と誕生する中で、美術の多様性と他館とは異なる個性を求めるアート」が美術館のテーマになつたのか。日本各地に

が「本をめぐるアート」に相当するかどうか問い合わせながら、時には激しい議論も交えつつ、収蔵作品を決定する。かく選ばれた作品の中には、花火玉の中に詩と版画を収めた藤井敬子の「RED aka」や、ボックスの中に多数の複製物を収納し、取り出していくとあたかも小さな美術館が出現するかのようなマルセル・デュシャンの「トランクの箱」(註1)等も存在する。一見して本とは思えない作品でも、その内容により「本をめぐるアート」になり得る場合があるのだ。

また、「本」と「美術」をめぐる言葉 자체も私達を悩ませる。例えば当館では昨年、「本」という美術—大正期の装幀から現代のオブジェまでーと題した展覧会を行つたが、装幀の「帳」という字を決めるまでが大変だった。「そうていひは當用漢字による一般的な表記である「装丁」」の他に、装幀、装釘、装訂と様々に書き表され、各々意味内容が異なると言われている。展覧会担当者はその詳細について方々調べまわつたが、実態は混沌として結論が出ない。出品内容と照らし合わせて、今回を取りあえず「装幀」に落ち着かせたのである。ちなみにこの「そうていひは「本をめぐるアート」」の一部だが、全てではない。「造本」や「装本」という言葉もあるが、これもまた不十分である。外国语においても「アート・ブック」「ブック・アート」「リーグル・ダルティエスト(フランス語で芸術家の本の意)」「ペインター・ブック・ブック」「アーティスト・ブック」「ブック・オブ・ジエ」「ブック・イン・スタイルーション」など、本と美術をめぐる言葉は際限がない。しかも「そうていひ」同様に定義が難しく、「本の美術」をめぐつては、いまだに言葉の使い方一つにも多くの議論がなされているのが現状である。

「近代」美術館が統々と誕生する中で、美術館のテーマになつたのか。日本各地に

親しまれる存在として選んだテーマが「本」であった(付け加えれば、本は比較的収集の容易な美術作品でもある)。欧米では美術館や国立図書館、大学図書館で早くから「アートとしての本」に注目し、収集や展示を行ってきた。けれども国内で、資料ではなく作品として本を収集する機関はこれまで見られなかつた。本を美術作品と捉え、テーマに掲げた美術館は、日本ではうらわ美術館が最初だと言つてよい。

前例がないだけ

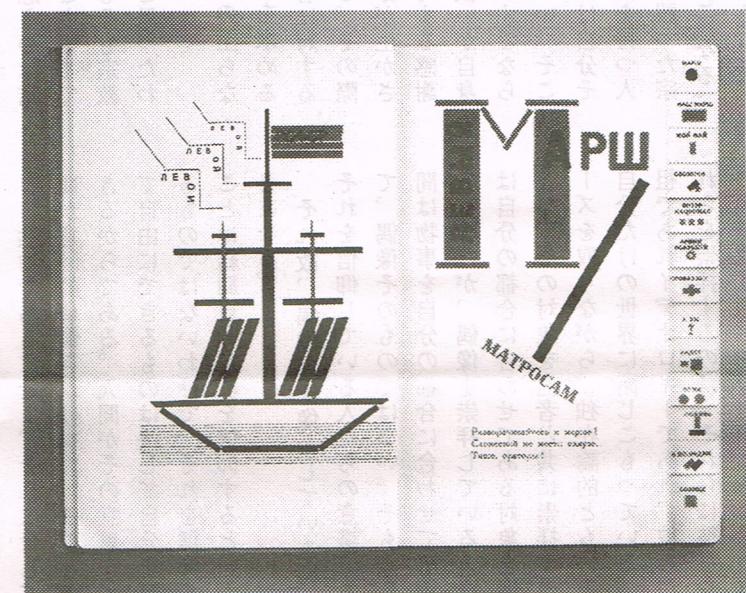
クションを形成するのは大変である。手始めに海外では二十世紀の美術動向を、日本ではこのジャンルで最も影響力のある美術家、恩地孝四郎(註2)を基点に収集を進めた。そのため収集の時代区分は二十世紀に限られている。イタリア未来派による金属やボルト留めの本(註3)、ロシア・アヴァンギャルドの本(註4)、

シヤガールやマティス、ピカソの挿絵本(註5)、キーファーの砂の本(註6)。雪岱、夢二、劉生らによる大正期の装幀から、芹沢銈介の工芸的な本、池田満寿夫の豆本、版画家と詩人の共同制作による詩画集、現代作家による鉄や鉛でできた本など。収集作品は何よりもまず美術家が携わっていることを条件としたため、二十世紀とは言つてもグラフィック・デザインや装幀家は対象外となつており、絵本の類も收められていない。今後どの時代のどのような作品をどこまで収集するか、課題は山積みである。うらわの本コレクションはようやく今一步を踏み出したところなのである。このコレクションを主体に「もうひとつの扉—二十世纪・アーティストの本」や前出の「本と

本を作るワークショップを行つたり、本の作品を地元小学校に「出前」して出張事業を行つたりしている。

本を扱つていると、他の美術作品では思いも寄らないことに度々頭を悩まされる。例えば作品のデータ収集。作家名、作品名、制作年、サイズ、素材、技法などに加え、文章を書いた著者名、挿絵を描いた美術家名、発行年および版の別、ページ数、制作部数とその内訳、タイプグラファーや刷師、装幀家、出版社名等々、拾い上げるだけで大変である。データ漏れを見付ける度に作品を参照するのだが、これが度重なると収蔵庫へ向かう足取りはどんどん重くなつていく。

い



■ロシア・アヴァンギャルドの本/リシツキー 声のために

ジの間に紙を挟んだり、綴じの固い本にて楽しむべき本を、来館者に自由に手にしてもらうこととは、作品保存の観点から非常に困難である。額装して中のページを見せる、コンピューターの画面上で擬似的にページをめくるようにする、復刻本を手に取つてもらう、ギャラリー・トークの際に作品を取り出しページを繰りながら説明する、といった策は講じてゐるもの、大半はケースの外から多面的な本の一面のみを鑑賞してもらうしか

ない。このケースの中にどう作品を展示するか。本立てに載せたり、アクリルのチップで立てた本を支えたり、透明のテープで開かないページを押さえたり…。本の作品に特有の悩みは尽きないが、もちろんそればかりではない。撮影や展示の苦労はむしろ、これまで注目されることが多い少なかつた「本をめぐるアート」の面白さ、奥深さを伝えたい一心から生まれている。本といふのは、私達に最も身近な存在が美術と出会い、別の形となつて私達の前に現れる時の驚きや楽しみは格別である。その魅力を少しでも忠実に、できるだけ多くの人に伝えていきたいと思う。「本をめぐるアート」をめぐる試みは果てしなく続いていくのである。

本の展示も同様である。本来手にとつて楽しむべき本を、来館者に自由に手にしてもらることは、作品保存の観点から非常に困難である。額装して中のページを見せる、コンピューターの画面上で擬似的にページをめくるようにする、復刻本を手に取つてもらう、ギャラリー・トークの際に作品を取り出しページを繰りながら説明する、といった策は講じてゐるもの、大半はケースの外から多面的な本の一面のみを鑑賞してもらうしか

ない。このケースの中にどう作品を展示するか。本立てに載せたり、アクリルのチップで立てた本を支えたり、透明のテープで開かないページを押さえたり…。本の作品に特有の悩みは尽きないが、もちろんそればかりではない。撮影や展示の苦労はむしろ、これまで注目されることが多い少なかつた「本をめぐるアート」の面白さ、奥深さを伝えたい一心から生まれている。本といふのは、私達に最も身近な存在が美術と出会い、別の形となつて私達の前に現れる時の驚きや楽しみは格別である。その魅力を少しでも忠実に、できるだけ多くの人に伝えていきたいと思う。「本をめぐるアート」をめぐる試みは果てしなく続いていくのである。

ヒヒで

なぜ、「本をめぐるアート」が美術

館のテーマになつたのか。日本各地に

「近代」美術館が統々と誕生する中で、美術の多様性と他館とは異なる個性を求めるアート」が美術

て、また私達に最も身近で親しまれる存在として選んだテーマが「本」であった(付け加えれば、本は比較的収集の容易な美術作品でもある)。欧米では美術館や国立図書館、大学図書館で早くから「アートとしての本」に注目し、収集や展示を行ってきた。けれども国内で、資料ではなく作品として本を収集する機関はこれまで見られなかつた。本を美術作品と捉え、テーマに掲げた美術館は、日本ではうらわ美術館が最初だと言つてよい。

クションを形成するのは大変である。手始めに海外では二十世紀の美術動向を、日本ではこのジャンルで最も影響力のある美術家、恩地孝四郎(註2)を基点に収集を進めた。そのため収集の時代区分は二十世紀に限られている。イタリア未来派による金属やボルト留めの本(註3)、ロシア・アヴァンギャルドの本(註4)、シヤガールやマティス、ピカソの挿絵本(註5)、キーファーの砂の本(註6)。雪岱、夢二、劉生らによる大正期の装幀から、芹沢銈介の工芸的な本、池田満寿夫の豆本、版画家と詩人の共同制作による詩画集、現代作家による鉄や鉛でできた本など。収集作品は何よりもまず美術家が携わっていることを条件としたため、二十世紀とは言つてもグラフィック・デザインや装幀家は対象外となつており、絵本の類も收められていない。今後どの時代のどのような作品をどこまで収集するか、課題は山積みである。うらわの本コレクションはようやく今一步を踏み出したところなのである。このコレクションを主体に「もうひとつの扉—二十世纪・アーティストの本」や前出の「本と

《うらわ美術館展覧会案内》

◆2002年4月27日(土)~7月7日(日)◆

絵で国際交流! うきうき・わくわく・アートランド+こども学芸隊
世界40ヶ国の子供達が描いた150点の絵をもとに、地域の小学生たち
がこども学芸員となってワークショップを行い、ミニ展覧会を構成します。
観覧料:一律210円(5回回数券700円) うらわ美術館ギャラリーA

同時開催「十人四色一初公開・新収蔵を含む館蔵秀作展」
収蔵品の中から、10人の作家の親しみやすい作品や、今まで公開の
機会が少なかった作品、初公開・新収蔵の作品を4つのセクションに分
けて展示します。
観覧料:無料 うらわ美術館ギャラリーB・C

◆2002年4月20日(土)~10月14日(月祝)◆

コレクションによるテーマ展V

「アーティストの作った雑誌、その試み」

未公開のコレクションの中から、アメリカ、ドイツ、フランス、日本等で発行された、アーティストの手かけた雑誌11タイトルを紹介します。
観覧料:無料 うらわ美術館ギャラリーD

うらわ美術館

月曜日休館(月曜が祝日の場合、その翌日)

午前10時~午後8時

〒336-0007 さいたま市浦和仲町2-5-1 浦和センチュリーシティ3F
TEL: 048-827-3215 FAX: 048-834-4327

info@uam.urawa.saitama.jp http://www.uam.urawa.saitama.jp

(註1) マルセル・デュシャンの「トランクの箱」(1961年 40.6×37.3×8.9cm 作品図版及びレプリカ68点、緑色の布貼ケース)「大ガラス」や「階段を降りる裸婦」「泉」など、オブジェを含む、彼の最も重要な25年分の作品のレプリカ(複製物)68点が収められている。(註2) 恩地孝四郎(1891-1955年)／本の総合芸術性を提倡した作家で、「出版による作品」である詩画集のほか、絵本や雑誌著作、ブックデザインなど多方面に大きな足跡を残した。飛行機に初めて乗った時の体験をもとに「写真や活字、木版画を巧みに組み合わせた『飛行官能』(1934年版)26.9×19.9×1.0cm)など。(註3) イタリア未来派による金属やボルト留めの本／機械のダイナミズムやスピードを崇拜し、あらゆる分野で活動を展開したイタリア未来派は、金属板による本(トゥソリオ・ダルビ)「ソラ」未来派の自由態の言葉」(1932年 金属にリトグラフ、24.5×24.0×2.2cm)や、工業製品であるボルトを使つて綴じた本(オルトウナード・ドベーク「未来派ドベーク 1913-1927」1927年 紙、ボルト、ナット 24.5×32.0×4.6cm)など、機械贅美を如実に示す本の制作も行つている。(註4) ロシア・アヴァンギャルドの本(オルトウナード・ドベーク「未来派ドベーク 1913-1927」1927年 紙、ボルト、ナット 24.5×32.0×4.6cm)など、機械贅美を如実に示す本の制作も行つている。(註5) ロシア・アヴァンギャルドの本／20世紀始めのロシア・アヴァンギャルドにおいては、その革新的な思想を伝えるため、小冊子や雑誌が多数発行されている。本といふのは、私達に最も身近な存在が美術と出会い、別の形となつて私達の前に現れる時の驚きや楽しみは格別である。その魅力を少しでも忠実に、できるだけ多くの人に伝えていきたいと思う。「本をめぐるアート」をめぐる試みは果てしなく続いていくのである。

より多くのコミュニケーションに対する負担が生じる。話の前提が共有されない以上、より効率的にコミュニケーションをするために話の前提に関わる事柄を出来るだけ省略しようとする傾向が生まれるからだ。このことは閉じた社会ならばどこにでも見られる傾向であり、日本人のコミュニケーションのあり方を少し顧みれば、特に異常なことは思われないであろう。この国では以前から「話し上手より聞き上手」という言葉が重んじられているし、自分の意見をはつきりいとうと「一言多い」といわれることもしばしばである。

しかし

虚構による社会のシステムが存在するのは

別に宗教の世界ばかりではない。その実態はお金によって成り立っている私たちの経済社会の現実によりはつきりと見て取ることができる。シルビオ・ゲゼルという経済学者(註)はその主著である「自然的経済秩序」の第3部で、金や銀などの商品交換の媒介となる貴金属がそれ自身の価値によって大切にされるのではなく、その商品との交換能力によって価値を持つものであり、それ故に紙幣がそれ自身には効用はない。それ自身は食べられもしないし、衣服にもならない。しかし、それを求めて人々は奔走する。それはお金が自由に商品と交換されるからであり、その商品の持つ効用がお金の効用とみなされているからである。このことは一見当然のように思われるかもしれないが、世の中を見ればこの当然の事実が見失われているのも確かのことだ。現実に動いているお金の90%以上はマネーゲームに 対応して動いているといわれており、その中で株や他国のお金などの形を通じてお金の価値はさまざまに変化している。またお金そのものの量も、将来に対する期待に基づく銀行の信用創造によって貿易である。

お金が

人の作ったものである

通貨危機が起これば、我々が生み出したはずの富の多くが失われ、人々の富を生み出す能力にもかかわらず、それを生かすことができなくなるだろう。

大化している。現代社会ではお金の貸付に伴い利子や配当などの利益が生じるのが普通だが、記号であるお金そのものが生み出す利益によって社会は常に左右されているわけである。仮に何らかの形で

■プロフィール (いわた・のりあき) 哲学者。元著作の邦訳はまだほとんどないが、次のURLで通貨の運動にも大きな影響を与えていた。彼の著作の邦訳はまだほとんどないが、次のURLで

を学ぶであろうと考えている」と述べている。一般に、彼の名は時間と共にその価値を失うスタント貨幣の考案者として有名だが、現在の地域

著作の邦訳はまだほとんどないが、次のURLで

関係する情報を図にすることができる。「新たな経済」<http://www3.plala.or.jp/mnigeccon-jp.html>

大分県庁の公務員で現在はフリーの立場で研究

<http://www.oec-net.or.jp/iwata/index.htm>にてその著述を公開している。

Beとして存在した芸人マルセ太郎

パフォーマンス

——正しくおもしろく、そしてやわらかく生きた証

昨年

他界した父、マルセ太郎が残

した言葉で一番印象に残つて いるのは、「Be動詞への自信」についてである。以前、「週刊金曜日」に「金曜エッセイ」として掲載されたので、ご存知の方もいるだろう。講演先の岐阜県のとある中学校には、その話に感銘した校長先生が作った「B」の碑があると聞く。

二十年前、私が中学に入学したての頃、父は真新しい英語の教科書を持ってござせ、英語を学ぶということはどういうことかと話してくれた。単にコミュニケーションの手段として勉強するだけではつまらない、言葉は文化であるのだから、言葉を通してその言葉を話す民族、国の人間を識ることが大事なのだ、と言つて、教科書の最初のページを開き、Be動詞について話し出した。

I am a student. これは『私は学生です』という意味だ。学校で先生はきっと、このamの下に日本語で『です』と書けと言うだろう。しかしこれは決してイコールではない。日本語には無い概念であることをまず知つておかなければならぬ。では一体このBe動詞とは何か」と問ひ掛け、教科書の空白に大きく「存在」と書いてみせる。

「ちょっと、勝手に書かないでよ」と言って、私はノートに写しなおした。

続けてそのあとに父が書いたのは、ハムレットに出てくる有名なセリフ、「To be

or not to be.」だった。

「生きるべきか、死ぬべきか。Beである」と、つまりこの世に存在していることが生きる」となんだ。だから、I am a student. も、訳は『私は学生です』だが、その『です』の内には、学生として“存在していること”が含まれているんだ。なー、おもしろいだろ!

中学の英語の教師にはそんな風に説明するのにおらんだろ、と父が得意げに私に話していたのをよく覚えている。それ以後、英語の勉強をみてもらったことはない。

その上で再構成し、社会を通して虚構のシステムを作り上げ、自らの世界に閉じこもることはどこにでも見られることがある。人が世界を自らの意識の中で捉え、そこで出会う対象を記号化し自らの意識世界の中で再構成し、社会を通して再び世界に働きかけることができる以上、偶像崇拜は常に我々にとつて根本的な問題なのである。

——世にいう成功者たちは、決まつて皆、「自信を持て」と言う。言われる

方も、「そうだ。何かひとつ自信を持つ

ものを見つけなければ」と自信を持つ

ことを正しいものとして受け入れてい

る節がある。僕は、あえて言います。

そんな「自信」なんて糞くらえだ。何故ならそれは、他と比較する上で成り立つ

っているからです。彼や彼女に負けな

ったという自信がある、というように競争の論理で成り立つていて、この手の

自信は、他を差別する優越感に浸り、

また逆に、理由のない劣等感に落ち込んだりするのが常である。では、まったく「自信」は必要ないのか。そんなことはない、生きるために大いに必要なことです。

そしてここから、Be動詞の存在につい

て語り、とどのつまり、この「Be動詞への自信」を持つことが大事なのだと説くのである。

考へてみれば、マルセ太郎という芸も、生き方も、「Be動詞への自信」で成り立つ

ればこそ、You are、あなたの存在も、He

is、彼の存在も認めることが出来、そこに

優劣の比較はない。

考へてみれば、マルセ太郎という芸も、

生き方も、「Be動詞への自信」で成り立つ

ればこそ、You are、あなたの存在も、He

is、彼の存在も認めることが出来、そこに

優劣の比較はない。

考へてみれば、マルセ太郎という芸も、

生前

、マルセ太郎の舞台を観たことのない人に、「どんなことをやっているの?」と聞かれるときぐらいい答えに窮することはなかつた。誰々のような、と比較対象になる芸人はいないし、ジャンルで言つても、漫談や一人芝居という風にはつきりと呼べるものでもない。「とにかく観てみて」としか言いようのない芸があつたのだ。それはまた追隨を許さぬものでもあつたので、彼が逝つたいまもこれからも「マルセ太郎のよう」と比喩される芸人は出てこないだろう。

家庭においてもBeであり続けた父だつた。マルセ太郎以外の父親を持つことがないのだから、何が普通で何が独特なのか、私に言い切ることはできないが、やはり芸と一緒で、他人を真似ることはなく、一般論で息子や娘を叱りつけることはなかつたことは確かだ。芸人である父親、在日である父親ということからもほど遠かつたように思う。

私は いわゆる「積み木くずし」世代で、「つっぱり」という言葉がまだ死語ではなく、近所には、「茶髪」ではなく「脱色」した髪をカールした「不良」がゴロゴロいた。反抗期で、いきがつて生意気な口を利く娘に対し、父親であるマルセはこう言った。

「おまえもあの不良の仲間に入つてくれればいい。でも言つとくが、おまえは使い走りで、一生リーダーにはなれないぞ」 小心者の本性を見抜かれ、そのまま引き下がつてしまつた。

「そんな性格じや、うちみたいな幸せな家庭を築くことなんて出来やしないぞ」 一人である私は、複雑な思ひにかられたものだ。

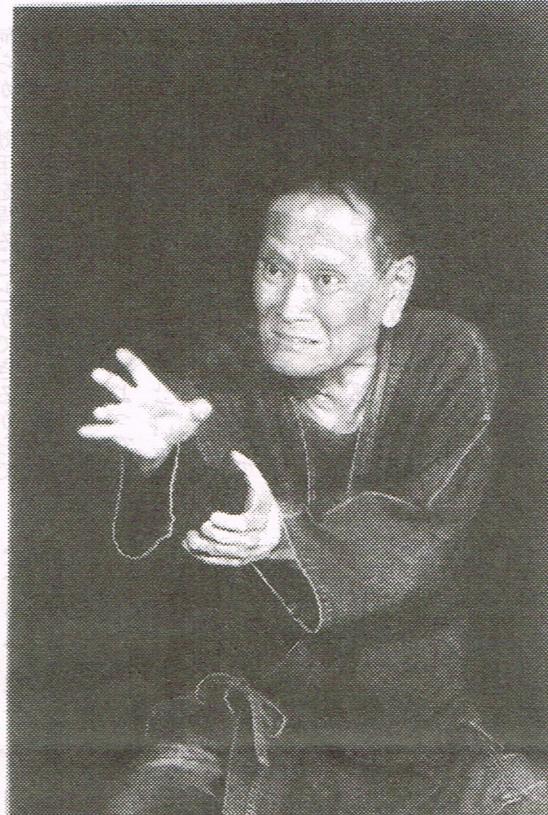
そんな風に父からはよく怒られ喧嘩もしたが、父親としての威厳などカケラもなく、また本人もハナからそんなものは望んでいなかつた。一家の大黒柱は母で

あつたし、父は茶柱ぐらいなものだつた。

「Be動詞への自信」を持つことを「自己愛」とおきかえてみよう。利己主義ではもちろんなく、かといって自分を讃めてあげようというノリとも違う、どこを切つても同じ血が流れ出る、そのこと丸ごとを思うという意味においての「自己愛」の強い男であつたのだ、父は。

「正しい人」と、山田洋次はマルセ太郎を称し、写真集『芸人マルセ太郎』(角田武・撮影、明石書店)に文章を寄せている。

——マルセ太郎の語りを聞いていて常に思うことは、ああこの人は当たり前のことを言つてゐるんだ、という納得であ



撮影：角田武

本人の

言葉で「良き外野席の客になろう」というのがあるが、拍手を送る相手の誠実な生き方を応援しながらも、心身ともに弱つてしまふ人に対しては、「みな生き方が下に」とつぶやいていた。それは、日々もつとやわらかく生きればいいの

正しく、おもしろく、やわらかく生き抜いた男の言葉だからこそ、「Be動詞への自信を持て」ということが説教臭く聞こえないのではないかだろうか。

マルセ流

Be動詞論には続き

——フランス映画『仕立て屋の恋』の中で、アパート中の住人から嫌われ、殺人事件の犯人だと疑われている主人公の男に、刑事が訊きます。

「おまえは何だつて皆から嫌われているんだ」

主人公は答えます。

「わたしもあの人たちが嫌いです」

これがBe動詞への自信です。

「この切り口の鋭さが、マルセ太郎のBeであったのだ。＊

肝臓ガン

になつてからも、

世渡り上手な人間がおいしい目にあうことを忌々しく思いながら、苦渋のつぶやきでもあつた。

（＊）もつとやわらかく、神経領のいい

【資料】
「芸人魂」(マルセ太郎著、講談社)
「奇病の人」(マルセ太郎著、講談社)
「マルセ太郎 記憶は弱者にあり」(森正編著、明石書店)
★六月より隔月にて、マルセ太郎ビデオ上映会
■プロフィール(りか)ボーデビリアン故マルセ太郎長女。二年半に渡る世界放浪後、「バクシ」シ放りの浪記と題して体験談を語り、ついで歌い踊るというトータルライブを始める。以後マルセ太郎作・演出の喜劇に四本出演。たゞおもしろいのかと膝を打ちながら、そ

ドメステイックバイオレンス

(夫やパートナーからの暴力)
から脱出しませんか。

私たちには、同じ立場あなたと向き合います。
これからのために、下記のアドレスまでご相談ください。

E-mail:kabo8@abelia.ocn.ne.jp

CORAIN

DV被害者の会コバン(なかま)

空爆下のユーゴスラビアで 一涙の下から問いかける

ペーター・ハントケ著／元吉瑞枝訳
定価1500円+税 B6判
ISBN4-8102-0214-3

著者は、ヴィム・ヴェンダーズ監督の『ベルリン・天使の詩』の脚本も手掛けた、現代ドイツ語圏文学の最も重要な作家の一人。本書は激しい論議を巻き起したが、著者は孤立しながらもNATO空爆に抗議し続けた。

同学社

〒112-0005 東京都文京区水道1-10-7 TEL:03-3816-7011

■「La Vue」9号の訂正とお詫び■

9号の7頁掲載、元吉瑞枝著「メディアに隠された場所で——ユーゴへの旅」の3段10行めの「……と公言している。」とあるのは、正しくは「……と公言している」です。訂正してお詫びいたします。したがって、文意としては「……と公言しているのはチヨムスキではなく、コソボ解放軍」となります。

著者の元吉瑞枝氏ならびに読者・関係各位に対しまして、重ねてお詫びを申し上げます。なお訂正済みエッセイは、<http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/lavue.html>に掲載しております。

